［現代社会学部紀要　16巻１号, P17－26（2018）（一般論文）］

「善き隣人」としての妙好人
―P. A. ソローキンの利他主義研究の日本への応用―*

吉　野　浩　司**

Myokonin as “Good Nabors”

Koji YOSHINO**

はじめに

地震や自然災害、あるいは戦争や紛争・テロによる被害の報道がなされるたびに、ただちにその被害者たちへ手を差し伸べる支援活動が開始される。そうした支援の中でも、ボランティアなど生身の体を使った直接的な支援活動は、自分自身の日常の生活をいったん停止した上でなされなければならない。その限りにおいて、その支援活動は、利他的動機にもとづく他者への行為であるということになろう。

また、そうした支援活動には、比較的短期で終わるものと、長期にわたって継続しなければならないものとがある。困難な方は、むろん後者の長期にわたる支援である。支援者が、いったんは控えていた日常の生活へと立ち返らなければならなくなる日が、遅かれ早かれやってくるからである。これは支援活動にまつわる困難の一例であるといってよいだろう。人は利他的行為ばかりに専念できるわけにはいかない。

本稿の目的は、その困難さを克服する視座を、とりわけ日本の仏教文化史の文脈において見出すことにある。この目的を果たすために、ソローキン（Pitirim A. Sorokin, 1889-1968）が利他主義研究で例示した「善き隣人（good neighbors）」を取り上げるとともに、それとうまく照応する日本の妙好人といわれる人々の生き方とを対比することにする。

まずは、妙好人の行動規範が、どういうものであるかを知っておくために、柳宗悦（1889-1961）の妙好人論「馬鹿で馬鹿でない話」を紹介しておくとしよう（柳、1991：262-265）。それは三河に住んでいた、ある浄土真宗信者の夫婦の話である。

ある日の深夜、人が寝静まったころに、突然の暴風雨が起きた。夫婦は飛び起き、しきりに御本山のことを心配した。本山というのは、京都の本願寺のことである。押入れにしまってある、一番大きな風呂敷をひっぱりだしてきて、二人は裏山に登る。何を思ったか、二人はずぶぬれになりながら風呂敷を広げて、風を受け止めはじめた。少しでもいいから、御本山に向かう風を防ごうというのである。ようやく風が収まったころには、夜は明けようとしていた。二人は安堵の気持ちで山を降りたという。

この、一見ばかげた行為の中に、利他的活動を継続させるヒントが隠されているのではないだろうか。そのヒントとは何であるのか。それを、ソローキンと柳の著作を紐解いていくことで解き明かそうとするのが、本稿の具体的な課題である。

第１章　利他主義研究とその日本への応用の必要性

（１）ソローキンの利他主義研究への再評価

筆者がこれまで研究に取り組んできたソローキン社会学は、2000年ごろより、ロシアや欧米において再評価されるようになってきた。その機運の中で、現代におけるソローキン再評価の視点の１つとして浮上してきたのが、彼の利他主義研究である。社会移動、農村・都市社会学、社会学説史、文明変動論など、彼が切り開いた研究は数多い。しかし、これまで取り扱うことが、ためらわれているかに思われた利他主義研究に、にわかに注目がなされるようになった。それにはいくつかの理由が考えられる。それを列記するなら、下記のとおりであろう。

グローバルな多文化共生社会においては、どれだけ優れているとされている価値観であったとしても、それを一方的に相手に押し付けることができなくなった。たとえ善意に発するものであったとしても、そうすることで、むしろ弊害の方が目立つようになってきたのではないか。そういう理解がなされるようになった。それらは悪くする

* Received December 12, 2017
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

と、価値観のぶつかり合い、イデオロギー闘争、あるいは民族対立をまねくものとなってしまいかねないというわけである。こうしたことから、多様な価値観を許容するような思考と社会システムが求められるようになった。冷戦終結後のいわゆる「大きな物語」終焉以降のことである。

しかし、いうまでもないことだが、多様な価値観を許容すること、あるいは他者の自由を尊重することは、決して簡単なことではない。大げさな言い方をすると、自らの身体や精神を危険にさらすことにもなりかねないからである。しかし、だからといって多様な価値観を、単に相対的主義的に平板に並べるだけでは不十分である。それだけだと、他者の価値や自由に対する寛容や許容などではなく、むしろ無関心を意味することになるからである。こうして、多様な価値観を、１つの秩序だった体系に再構成しなおすという作業が、どうしても避けられなくなった。

ソローキンが、戦争と紛争の時代の幕開けともいえる、20世紀初頭より半世紀をかけて作り上げようとした統合主義社会学（Integralist Sociology）は、その総仕上げとして、利他主義研究を世に送り出したことは、ここで強調しておいてもいいだろう。それは、独自の文明変動論、さらには意識の構造論の延長線上に置かれているものである（吉野、2006）。ソローキンが再評価されている理由があるとすれば、この点をおいて他にないだろう。つまるところそれは、多様な価値観を体系化する視座が、ソローキンの統合主義社会学の中にあるのではないか、という期待からくるものである。そして、その視座を、身をもって体現している人々を、ソローキンは「善き隣人」として著作の中で大きく取り上げている。こうしてソローキンの利他主義研究では、「善き隣人」こそが、現代社会に求められている人々の生き方であると位置づけられることとなった。

それでは、このソローキン再評価と同時に進行している、利他主義研究への関心の高まりにたいして、それを日本において展開するとすれば、どのような作業が必要となるのであろうか。１つの案としては、ソローキンが「善き隣人」と認めた人々と類似するような人物を、日本の文脈を考慮したうえで探し出してみることになるだろう。

（２）利他主義研究の日本への応用

まずはソローキンの歴史社会学の観点からみた、日本文化を概観することから取り掛かろう。そのためには、利他主義が表れやすいとされている、「観念的文化心性（Idealistic Cultural Mentality）」というソローキン独自の概念を理解することからはじめなければならない。

「観念的」というのは、現実に存在する物理的な事物には目もくれず、ひたすら超越的なもの（例えば神）にリアリティを感じる心性である。これを日本文化の中から選び出そうとするなら、どのような思想になるのであろうか。おそらくそれは、浄土思想ということになろう（吉野、2013a）。

平安時代に極限に達した末法思想は、現世に対する望みを捨てて、すべてを未来、来世に託す、という思考態度をとった。浄土思想はそれを素地として広まったものである。最初は平安末期の貴族社会ではやり（平等院鳳凰堂の建築）、阿弥陀如来の仏像建立において全国的な広がりをみせ、さらに鎌倉期以降の浄土宗、浄土真宗の成立により、庶民のもとへも浄土思想が届けられることとなった。とりわけ浄土真宗の教えを日常生活の実践の場で展開しているのが、妙好人と呼ばれる人たちである。江戸時代以降、この妙好人が多く生まれることとなった。妙好人は、一般の信徒でありながら、浄土思想の深みをつかみ取るだけではなく、かえって高僧にも劣らないような利他的ないし非利己的な活動を実践するようになった（鈴木、1972；渡辺、1958）。

1950年ごろ、ちょうどソローキンが「善き隣人」に関心を示したのと同時期に、妙好人研究に没頭したのが、柳である[1]。くしくもソローキンと柳は同年の生まれで、世界戦争と民族紛争の時代という時代背景を共有していた[2]。とくに戦後の平和を築き上げるための土台を、民衆の善隣性に見出そうとしたところに、ソローキンと柳に共通する問題関心を見出すことができるのではない

[1] 周知のように、それまで忘れられた存在になりつつあった妙好人に対し、再発見のきっかけを作ったのは、鈴木大拙（1870-1966）である。彼は禅を中心とする仏教思想を海外に広める役割をはたしていたが、1940年代より、浄土思想に深い関心を示すようになり、その流れの中で、妙好人の研究に傾倒していった。柳の研究は、これを発展的に継承したものといえるだろう。

[2] 平和思想に関していうと、トルストイ（Лев Николаевич Толстой, 1828-1910）への共感の中にも、ソローキンと柳の考え方の近さを見出すことができる。

だろうか。

それでは、戦後から現代にかけての社会は、どのようなものであったのだろうか。ソローキンは現代社会を一言で形容する言葉として、「感覚的文化心性（Sensate Cultural Mentality）」という用語を使った。もちろんこれは、上述の「観念的」と対をなす言葉である。「感覚的」心性は、自己の五感に快不快の刺激を与えるものにリアリティを感じる。逆にいうと、目に見えないもの、神秘的な出来事、愛の働きなどについては、まったくリアリティを感じ取れない心性である。きわめて即物的、唯物主義的な性向を持っているといってもいいだろう。

ただ五感への快い刺激は、しだいに刺激と感じられなくなるという性質を持っている。当初は刺激的でありえたものが、しだいに刺激の乏しいものと感じられるようになる。そして「感覚的」な人々は、さらなる強い刺激を求めていくようになる。限度をわきまえなければ、それらは薬物中毒、ギャンブル依存症、拝金主義、倒錯的な性癖といったアディクションとなって現れることとなる。感覚文化の爛熟期には、そうしたことが社会現象として露呈してくるものである、とソローキンは述べている。確かに、このように考えてみると、現代は「感覚的」社会であるというソローキンの見立てでは、あるていど容認できる部分もあるのではないだろうか。

その一方で、こうした傾向は、「感覚的」時代の社会科学においても確認できる。というのも、「感覚的」時代の社会科学は、比較的目に付きやすい、センセーショナルな、社会のネガティブな側面を、好んで取り上げることが多いからである。すなわち病理的現象、逸脱行動、犯罪、性倒錯、自殺などである。同様に、新聞や雑誌は、身の毛もよだつ殺人鬼の物語や性的醜聞、あるいは偽善ないし狂気の沙汰を取り上げるばかりで、人々の耳目を集めないような善行、ないしはポジティブな事柄をほとんど取り上げようとはしない（Sorokin, 1950：邦訳7）。

もちろん社会のネガティブな側面への知見は、それにより深まっていくことは間違いない。そのことに問題があるわけではない。しかし、それと逆の現象、すなわち社会のポジティブな側面についてはどうであろうか。実際のところ、ソローキンの時代から現代にいたるまで、この部分にまで社会科学の探求は及んでいない、というのが実情ではないだろうか。社会のポジティブな側面とは、愛、善行、天才、聖人、英雄、利他的行為などである。こうした社会のポジティブな側面の研究は、これまで深められてこなかった。

冒頭で述べた妙好人夫婦の行いについても、そのネガティブ面をあげつらっていくと、それこそきりがない。夫婦のとっさの行動に対し、大方の反応は次のとおりであろう。無謀すぎる。怪我でもしたらそれこそ大変だ。風呂敷ぐらいで防ぎきれるはずはない。気でも違ったのか。京都が悪天候であるとは限らないだろう。こうした否定的な意見は、至極まっとうな意見である。しかし、妙好人夫婦の行為から受け取られる印象は、それだけであろうか。これらの面とは別に、「何かしらひどく心を打つものがある」（柳、1991: 262-265）のも事実ではないだろうか。それが柳の問題提起である。とりわけ信仰を持つものは、なおさらである。この「心を打つ」ものの正体は、はたして何なのだろうか。

ネガティブ面を強調する社会科学における現状は、実は「感覚的」文化の、１つの特徴であるのかもしれない。「今日まで、われわれは人間の利他的でない型――すなわちマイナス面の犯罪者・狂人・宗教的な罪人・愚鈍者・利己主義者――については十分に研究してきたのであるが、人間のプラスの面――すなわち創造的天才・聖者・「善き隣人たち」についての調査は怠ってきた」（Sorokin, 1950：邦訳2-3）。「感覚的な社会科学の一面性が正されなければならないときがきた」。「ポジティブな価値・人格・人間関係・現象を研究すべきである」（Sorokin, 1950：邦訳80）。これがソローキンの利他主義研究へと向かっていった直接の動機であり、またソローキンが再評価されつつある１つの要因にほかならない[3]。妙好人の中に、人の「心を打つ」何ものかが隠されているのであれば、それを発見するのは、そうしたソローキンのいうポジティブな側面への探求によってであろう[4]。

[3] さらにいうと利他主義に関する調査には、派生的な効果も見られたとソローキンはいう。あくまでも付随的なものではあるが、利他主義の存在が明るみになることで、一部の人々の間で、利他主義に目覚めるようになったという。すなわち、調査されたことをきっかけに、利他主義に関心と興味を持ち、積極的に利他主義を自己同一化の対象とするような効果があった、とソローキンは述べている（Sorokin, 1950：邦訳132）。

（3）利他主義研究の調査内容

それではソローキンが取り上げた「善き隣人(Good Neighbors)」とは、いったいどのような人物であったのか。それについて、ここで簡単に紹介しておきたい。

1941年から1948年にかけて、ラジオパーソナリティであったトム・ブレネマン（Tom Breneman, 1902–1948）が手がけた、「ハリウッドで朝食を(Breakfast in Hollywood)」というアメリカ人気ラジオ番組があった。この番組では、視聴者から「善き隣人」の推薦を募り、番組製作者が番組で取り上げるべき「善き隣人」を選定した上で、鉢植えのチドリを贈るということが行われていた[5]。貧しい人々や体の不自由な人々に食事を提供し、ホームレスや家をなくした人々に住居を貸し与え、診察や薬の料金を払えないひとには無償で行う、といった活動に継続的に携わっている人々である。

取り上げられた「善き隣人」は、決して英雄的な業績をあげたわけでも、有名人になっているわけでもない。身近にいる、ごく普通の人たちである。しかし利他的行為には、何も英雄や有名人が必要なわけではない。それどころか、ソローキンは、「偉大な利他主義者のみでは、社会が生き延びるために必要とされる最小限の愛と相互扶助さえ、供給することができない」とまで述べている。実のところ「それら〔愛と相互扶助〕は、大勢の地味な『善き隣人たち』によって供給されている」のである。そうした「地味」な人たちこそ、「莫大な量の『愛のエネルギー』を生み出している」のだ、ともソローキンは報告している(Sorokin, 1950：邦訳13)。

第２章 「善き隣人」としての源左の一生

それではソローキンのいう「善き隣人」と、柳が語る妙好人との間にある共通点を、これより述べていくことにしたい。それにより、日本における利他主義研究の手がかりは妙好人研究によって得ることができる、ということが明らかとなろう。具体的には、ソローキンが『利他愛』(Sorokin, 1950）の中で「善き隣人」の特徴として語ったいくつかの事柄を、柳が論じる妙好人の「源左の一生」(柳、1991：209-242）と照らし合わせながら論じていくことにしたい。源左（1842-1930）は、現在の鳥取県鳥取市青谷町山根に生まれ、農業を生業とし、この地で死んだ妙好人である。柳は、１カ月にもわたるフィールドワークをまとめて刊行した、『妙好人―因幡の源左』(柳・衣笠編：1960）において、源左のことを詳しく論じている。その冒頭で総括されているのが、「源左の一生」である。以下ではこれを、「善き隣人」との対比の素材として用いたい。

（1）利他主義の実践的理解

第一に取り上げるべきは、善隣性（利他主義）について、「善き隣人」がどのような考えを持っているのかについてである。「真の善隣性とは黄金律・愛・友情等に関する多くの知識と説教よりも、むしろ、これらの諸原理を他者や世界に対するその人の明らかな行動と自然な態度に十分取り入れられている」(Sorokin, 1950：邦訳58)[6]。黄金律も愛や友情の教えも、単に知識として貯めこんだり、説教したりするだけでは意味がない。「善き隣人」たちは、教会の教えや信仰・信念に基づいて、それを実行に移すことの方に、むしろ重きをおいたといえるだろう。そもそも「利他主義と学業的才知との間にはなんら密接な関係はない」(Sorokin, 1950：邦訳266)。

これに対し、「善隣性」に関する源左の考えを見てみると、やはり「善き隣人」と同種の考えを抱いていたことがわかる。すなわち「彼〔源左〕はただ純正な正常な真宗の教えをまともに受継い

---

[4] 最近、ポジティブ心理学が注目をあつめている。これは心理学が、精神疾患の治癒や病理的な現象の解釈のみならず、一般の人々の幸福や安心感を増進する方法の解明を迫られるようになったことの現われであろう。ソローキンの統合主義社会学における利他主義研究は、その意味でポジティブ社会学という性格を持つものである。

[5] ソローキンが『利他愛』(Sorokin, 1950）の中で、調査の対象とした利他主義者は、主に、このラジオ番組で「善き隣人」に認定された人たちである。これらの人物は、必ずしも著名であるとは限らない。むしろ市井にうずもれた人たちである。しかし、利他主義的活動と善隣性にかけては、人並以上であると認定された人たちばかりである。ソローキンの調査は、「善き隣人」の中から500人に絞り込み、そのうちの何人かについては自伝を書いてもらったり、アンケートに答えてもらったりなどした。そうした二重、三重の調査資料の厳選によって得られたのは、93名の「善き隣人」のサンプルである（Sorokin, 1950：邦訳9-10)。

[6] ここでいう「黄金律（Golden Rule)」とは、一般に、他人が望まないことをしてはいけないという、世界のさまざまな宗教に共通して説かれている基本原則を意味する。キリスト教では、「人からしてもらいたいとあなたが望むことを、人々にしなさい」(「マタイ福音書」７：１２）と、より積極的な表現で説かれている。

だ。ただ彼の偉さはそれを思想に培ったのではなく、日常の行いに深めて行った。それ故教えを行いで理解したといってもよい」(柳、1991：240)。あるいは、「彼は絶えず聞法を怠らなかったが、同時に得たものを進んで人に届けた」(柳、1991：239)。このように教えや知識とは、それを実行に移すためにこそ存在する、と源左は考えていたのである。「善き隣人」にしても妙好人にしても、教会や寺社で得た知識を、そのまま受け取り、ただちに実践したのである。

「彼〔源左〕は道路の改修とか水害の修復とか、公の仕事には進んで労力を献げた。また困っている人にはよく力を貸した。重い荷物を背負ってやったり、年寄だとおぶってやったり、病人をいたわったりした。また他人の田がやせていると肥をやったり、畦に穴があいていると塞いでやったりした。しかし別に人に話すでもなかった。それは彼が為しているのではなく、させて貰う悦びを得ていたからである」(柳、1991：223)。

（2）利他主義にいたる経路

第二に問題としたいのが、「善き隣人」や妙好人は、どのような経緯で、利他的行為を実践するようになったのか、についてである。ソローキンによると、それには２つの経路が考えられるとしている。第一に、徐々に善隣性を獲得していく場合と、ある劇的な事件をきっかけにそうなる場合との２つがあるそうである（Sorokin, 1950：邦訳103-104)。前者は「幸運型」、後者は「破局型」と名付けられ、その「中間型」を含めたものが、「善き隣人」になる経路のすべてである(Sorokin, 1950：邦訳270-271)。

ここでなされている重要な指摘の１つは、「破局型」に関するものである。生命の危険を感じるような災厄に際会したときに、一般的な人々が取る態度は、両極端な２つの反応となって現れてくるのだという。すなわち、災厄に見舞われた人は、善人と悪人との二派に分かれていくのだという。これはどういうことを意味するのであろうか。

一般には、不幸や不遇や挫折は攻撃性を生む、と信じられている。しかしこれは、あまりにも一面的な見方である。実際には、むしろ逆の行動特性を持つ場合もありうるのだというのである(Sorokin, 1950：邦訳106)。すなわち、「『善き隣人たち』は憂鬱や退屈で困るということはなく、人生のむなしさや無意味さに苦しむこともない。悲劇的な出来事に会っても、彼らはそれを化して、人生の豊かさを高め、愛と親切心の大切なことをますます強めるものとする」。これは「個人的な悲劇」が、かえって「利他主義的転化を促進する要因」ともなりえることを例証するものであろう。「利他主義もしくは自我滅却が人生を意義ある幸福なもの」にする、あるいは「悲しみと悲劇に対処する」力となるという主張である(Sorokin, 1950：邦訳124-125)[7]。

源左の場合についても見ておこう。父の死という災厄が、彼を妙好人へと導いた。死んだら「親様」(阿弥陀如来）を頼れ、というのがその父親の遺言であった。その言葉を、18歳の源左は、そのまま理解し、実行に移したのである。むろん平坦な道のりではなかった。「父の急逝は源左の心を底からゆり動かした。目の前に見た死とは何なのか。この儚い生とは何なのか。父のいう親様とは誰のことなのか。何処にいるのか。衝動は烈しかったと見えて、彼はこの二大問を掲げて真剣になった。予々父が仏法のことを語っていたのが今更に思い出された。彼は悩みを抱いて願正寺の門をくぐった」(柳、1991：212)。人が死ぬとはどういうことなのか、親様とは誰なのか、それが源左の２つの疑問であった。どのようにしてこの疑問を解いたのかについては、次の第３章で改めて述べることにしたい。

（3）利他主義者となった要因

第三に、「善き隣人」の善隣性は、いったい何に由来するものなのか、これについて考えてみたい。ソローキンは「善き隣人」の研究から得られた、いくつかの要因について述べている。まず１つめは家庭による感化が挙げられている。家庭環境が、人に善隣性を植えつけるのだという。源左の父もまた、「親様にたよれ」と遺言で述べるほどに、真宗の教えを抱いていた。しかし、家庭環境に劣らず重要なのが、人が生まれてから死ぬまでの経験であるという。言い換えると、自分にふ

[7] これがいわゆるソローキンの「分極化の法則（Law of Polarization)」である。この主張は、そのままソローキンによる精神分析学への批判とも直結している。すなわち、フラストレーションが攻撃性、反社会的行為を生むというフロイト（Sigmund Freud, 1856–1939）の考え方が、あまりにも一面的であることへの不満である（Sorokin, 1950：邦訳272)。

りかかる社会的・文化的な力（「全般的な人生経験」）、これが人に善隣性を植え付けるというのである。これが２つめの要因である（Sorokin, 1950：邦訳101-102）。

源左が上記の２つの問題を解き、妙好人となり得たのは、彼を取り囲む環境がよかったからである。柳も述べているように、妙好人を「培い育てる力」を、個人に限定してはならない。「もし山根の村に篤信な善男善女がいなかったら、よもや源左はその仏縁を結び得はしなかったであろう」。「源左は無数の信徒の結集した姿」であるのだという（柳、1991：242）。真宗の言葉でいうところの、「土徳」が善隣性を人に植えつけた、ということになるだろう。ここで重要なことは、書物や学校教育の役割は、善隣性にとって、かなり限定されたものでしかない、ということである（Sorokin, 1950：邦訳101）。学校教育という点からいうと、源左は無学そのものであった。ひらがなさえ書くことがおぼつかず、文字を読むことも、当然できなかった。経文をそらんじはしたけれども、それは聞き覚えたものである。しかしながら、そうではあっても、源左は真宗の教えに関して、深いところでの理解を示したのである。

（４）利他主義者の特徴

第四に、「善き隣人」たちに共通する、その他の特徴についても触れておきたい。ソローキンが挙げているのは、下記のような特徴である。「善き隣人」は、女性が多く[8]、中流階級の出身が目立つこと、また農村生まれが多いこと[9]、特定の宗教と関係を持っていること、激しい音楽を好まないなどである（Sorokin, 1950：邦訳60-100）。またソローキンが挙げている激しい音楽を好まない、という「善き隣人」の好みについて付言しておくと、源左の場合、「芝居とか相撲とかの娯楽に時をすごすことはほとんどなかった」ということと類似するといえるかもしれない。「人間は働くように造られていると彼はいつもいっていた。働くことを彼はむしろ可愛がった」（柳、1991：222-223）。

（５）利他主義と健康

第五に、「長寿や調和のとれた生活」をもたらすのが、「非利己的な愛と聖者性（saintliness）による治療法」であるとのソローキンの指摘がある（Sorokin, 1950：邦訳259）。心身を健康・健全に保つことができるのかどうかについては、生まれ持った資質によるところも大きいだろう。しかし、後天的に得られることもある。むしろ最近では、愛や笑いや深呼吸と、心身の健康や長寿とのかかわりについて、医学や精神医学や心理学をはじめとする、様々な分野で取り上げられるようになってきた（ペック、2010；カズンズ、2001；ハン、2017）。その先駆けとなるような研究成果が、ソローキンの利他主義研究にも見られる。

源左もたいへん健康であった。「丈は五尺四寸ばかりであった。躰質は頑丈で骨格は逞しく、眼は大きく口許はしまり、特に彼の両手は弛まざる労働のしるしであった」。「『この手は働くためにこさえてむろうた手で御座んすけえなあ』とも、『親からむろうた手というものは丈夫なむんだのう』ともいった」（柳、1991：220）。「美味いものは好んで人に与え、自分は人の棄てるようなものを悦んで食べた。そんなものを食べては障りはしないかといわれると、『お慈悲の力は強いでなあ』と答えた（中略）。彼は病気をしたことがなかった。従って薬もとらなかった。酒や煙草も飲まなかった」（柳、1991：222）。生まれつきの丈夫さでもあろうが、弥陀からの愛、他者への愛に満たされた気持ちが、彼の健康を支えていたのかもしれない。

（６）利他主義と怒り

第六に、「愛は愛を生み、憎悪は憎悪を生む」という格言を、「善き隣人」の特徴として、ソローキンは実証的に明らかにした。それによると、「ある人が他のある人に概して友好的に接近する場合、そのケースの65パーセントから90パー

---

[8] 女性の妙好人に関して言うと、必ずしも多いとはいえないが、いないわけではない。代表的な女性妙好人を挙げると、蓮如の時代の了妙（＝よつ女、生没不詳）、摂州のおさよ（生没不詳）、長州のお軽（1801-1857）、三河のお園（1777-1853）などがいた。

[9] これに関して興味深い統計をソローキンが挙げているので、それを紹介しておきたい。それは聖者の出身階層についての資料である。「農民と労働者階級となると、14世紀までは、その出した聖者の数はきわめて微々たるものであったが、その後に数は増加し、19世紀に入ると、全聖者数の60パーセントに達し、20世紀においては100パーセントに達した」。「カトリック教会とロシア正教会では、上流階級や中流階級から聖者の供給を受けることをやめ、今や社会のピラミッドの最底辺から聖者たちをかき集めている」としている（Sorokin, 1950：邦訳265）。現代に近づくにしたがい、聖者の出身階級が、農民や労働者や下層階級になったということである。

セントは友好的な反応をひきおこすのに対し、攻撃的に接近するならば、ほとんど同じような比率で攻撃的な反応をひきおこし、また冷淡に接近する場合も、同様に冷淡な反応をひきおこす」(Sorokin, 1950：邦訳262)。

源左の場合でいうと、彼は怒ることがなかったという。むろん時には腹を立てることもあったのかもしれないが、それでも「彼の信仰の暮らしは怒りの鉾をいつも納めさせてしまった。誰よりも甲斐性のない自分を顧みる時、人の嘲りも憎みも盗みも彼には苦ではなかった」(柳、1991：224)。はたから見ると、彼の境涯は、必ずしも順風満帆ではなかった。むしろ不幸の連続といった方がよい。二人の息子が精神に異常をきたし、娘を亡くし、水害で田んぼを失ったことがある。あるいは二度までも家を火事で焼失してしまった。知人に金を取られたこと、兄に騙されて山を手放したこともある。しかしそのような時でも、源左は、何事も因果であるとあきらめ、逆に前世の借金を返すことができたことを、喜んだという[10]。柳は「彼の心の底にはいつも彼に代わって忍ぶ親様の大きな恵があった」という（柳、1991：226-228)。

憎しみ、対立、不幸を乗り越える知恵が妙好人にあった。その知恵をもたらすものが、「親様の大きな恵」である。ソローキンのいう、非利己的な愛である。「非利己的な愛は、単に生気を与える力であるにとどまらず、真の心の平和・意味のある幸福・本当の自由、想像力を確保する精神療法の最善の方法なのである。非利己的な愛は、ほとんど底知れないほどの可能性をもっているにもかかわらず、現代科学はそのドアをノックさえしない。聖者たちと善き隣人たちの経験は、かかる愛の療法を研究し展開することこそ、人生を生き甲斐あるものにする最も実り豊かにして有効なものである」(Sorokin, 1950：邦訳260)。

冒頭で述べた妙好人夫婦の行いに、「心を打つ」何ものかがあるのではないか。それが柳の問題提起であった。それを理解する手がかりとなるのが、ここでいうところの「非利己的な愛」であり、「親様の大きな恵」であろう。「善き隣人」でも妙好人でもない人間にとって、それはどうすれば身につけることができるのであろうか。

第３章　「善き隣人」と妙好人の「超意識」

本章では、「非利己的な愛」と「親様の大きな恵」を理解することを目指す。だがその前に、先送りにしていた問題について答えておかなければならないだろう。その問題とは、源左がどのようにして、信仰を深めていくようになったのかについてである。源左には、父の死後に浮かんできた２つの疑問があった。すなわち死とは何か、親様とは誰か、という疑問である。これらのことについて、知識としては願正寺の芳瑞和上をはじめ、同行そのたの人たちが教え、諭してくれたことだろう。しかし、それを心底より理解できたのは、これとはまったく別の特殊な経験によってであった。その機会は、ようやく30歳のころに訪れた。父の死からは10年以上の月日がたっていたことになる。源左の言葉によると、農作業用に飼っていた牛が、「他力」の教えを分からせてくれた。刈り取った、重くて持てない草束を、牛に担がせると、牛はそれをやすやすと持ち上げた。その瞬間に、源左は「他力」に気がついたのだという。それはどういうことか。

「他力の教えとは何なのか。人間には負いきれぬ業の科を、弥陀が背負って下さるとのことである。草を刈ったのは源左である。その草は業である。その業は源左の力では負いきれぬ。それを今背負ってくれるのは牛である。牛は弥陀の姿である。草を食んで牛は牛となる。その草を牛が、今や背負う。人間の業を食んで弥陀は弥陀となる」。このとき源左は、「いとも弱い自らの姿」を見出し、「その弱い彼をこそ待っている弥陀」の存在に気付いたのである（柳、1991：214)。

こうした「他力」の理解は、通常の知的な理解の仕方ないし論理的・合理的思考とは、大きくかけ離れている。妙好人は、どのようにして「他力」の本質を掴み取ったのであろうか。ソローキンの仮説からいうと、それはおそらく「超意識(super consciousness)」ということになるだろう。ソローキンの利他主義研究は、その独創的な意識構造論に特徴があるといってもよい。人間の意識は、「生物的無意識」、「生物的意識」、「社会

[10] むろん、こうした妙好人の姿勢に対して批判的な議論も存在する。その代表が、妙好人の従順さが、体制の擁護と順応を強めるばかりで、社会を善くしたり、自己の権利を主張したりする力とはなりえないというものである。しかしたとえ妙好人のような徹底的な受容の姿勢ではあっても、体制を批判したり、改善を求めたりすることは可能である。これについては拙論（吉野、2014）を参照のこと。

文化的意識」、「超意識」という５つの部分から成り立っている。利他主義との関わりでいうと、「超意識」が、特に重要である。「超意識」とは、「人間における神的なもの」、「真、善、美の高尚なエネルギー」、「最高度の創造的才覚」などと表現されるものである。

普段、人が意識するのは、飢えや渇きによる不快感（生物的無意識）、あるいは老・病・死への不安感・危機感（生物的意識）などである。不快感や不安感をコントロールするために、人間は決まりを作ったり、意味づけを行ったりする（社会文化的意識）。しかし、それらは、しばしば互いに矛盾する事態をまねく。例えば、教会では敵を愛することを誓うが、その同じ人が、国に戦争で敵を倒すことを誓う。この矛盾は、避けがたいことである。ここで出てくるのが、より高次の真や善や美という究極的な価値基準である。人は愛する人、子ども、友人のためになら死ぬことさえ辞さないときがある。生きたいという生物的意識が、真や善や美への想い（超意識）によって、あるいは利他愛によって乗り越えられたときに、そうした行為はなされる。

これほどの極限の状況ではないとしても、「超意識」に根ざした利他的行為（ボランティアなどの支援活動）には、そうした側面がある。そうであればこそ、その行為は継続的に行われることが可能となる。ただ生きる（生物的意識・社会文化的意識）のではなく、善く生きること（超意識）が、そこでは目指されている。「善き隣人」や妙好人が身につけていたのは、この超意識であったのではないだろうか。これらの人々の行いに対して、どことなく「心を打つ」ものが感じられるのは、この「超意識」の働きによってではないだろうか。

もちろん超意識それ自体を解明することは困難である[11]。しかしそれに比べるなら、超意識に根ざしていると思われる、利他的行為の実践例を見つけ出すことは、比較的容易ではないだろうか。なにより、ソローキンが「善き隣人」を取り上げたのは、超意識に根ざした利他主義の実践例を集め、それを分析するためであったということもできそうである。柳による妙好人研究も、それと同等の意味を持つと思われる。

「現代の聖者たちの大多数は―そんな人たちがともかくいるとすれば―日常生活の世界に生活し、彼らはその利他的精神的な仕事を最も世俗的な善き隣人として行っているのである。この点で、ガンジーとアルベルト・シュヴァイツァーは顕著な範例である」(Sorokin, 1950：邦訳268-269)。彼らのほかに、キング牧師（Martin Luther King, Jr.,1929 -1968）やマザー・テレサ（Mother Teresa, 1910–1997）などを加えてもいいだろう。そしてまた、地方の僻村にうずもれていたはずの、名もない「妙好人」も同列に扱っていいだろう。

これらの人々には、一様にモデルとなる人物や理想があった。そしてそれらは、知識としてではなく、体験として理解されたことはいうまでもない。この体験的な理解こそが、超意識の肝要なところである。それは、次のような理由からである。キリスト教や仏教をはじめ、様々な宗教における超越者は、信者に成り代わり苦難（原罪）を引き受けてくれている。その引き受けてもらっている超越者の姿に「温かさ」、「心を打つもの」を感じ取った人は、自らもその超越者の「似姿」として自らを擬するようになる。その自らを超越者に擬した行為が、善き隣人や妙好人の利他的行為に他ならない。したがって、超越者や理想を理解することは、ただちにそれを実行に移すことを意味していたのである。

ここで、最初の妙好人の夫婦の問題に立ち返ろう。夫婦のばかげた行為に対しては、それを軽んじるもの、あるいは怪我を気遣ったりするものなど、様々な意見があるだろう。しかし柳によると、それらはすべて、「合理的」な判断によるものである。合理的思考は正確ではあっても、そこに人の心を打つものはない。人が心を打たれるのは、「純な信心」に対してである。柳が着目しているのは、まさにこの点である。すなわち一宗を育て、御本山を守るような力、言い換えると大切なものに寄り添い、守り抜こうとする力は、合理的思考あるいは科学的思考からくるのではない。それは、「純な信心」からくるのである。「合理的懐疑の中からは、なかなか温かい清いものは生ま

[11] ミラーニューロンの研究が進み、人の共感のメカニズムが実証的にも解明されつつある。その成果は、利他主義研究にとっても有意義なものとなるであろう。なおギデンズ（Anthony Giddens, 1938-）の「再起性」概念を、ミラーニューロンの考え方を用いて読み解こうとする試みが、三原（2010）によってなされている。

れてまいりません」。合理的思考の方に組する現代人に、安心した幸福は見られず、かえって「馬鹿」といわれてきた妙好人の方に幸福がもたらされるのはなぜなのか。「悧口さ」は必ずしも「安心を決定」する力とはなっていないのではないか。柳が抱いていた疑問は、これらの点であった（柳、1991、262-265）。

聖者は「愛のエネルギー」の体現者である、ともソローキンは述べている（Sorokin, 1950：邦訳257）。妙好人夫婦の話を読んで、何か「温かい清いもの」を感じ、自らを鼓舞するものがあるとしたら、それこそが聖者の「愛のエネルギー」を受け取ったという証拠であろう。「愛こそは、一人の人間が身体的・生物学的・心的・道徳的・社会的な安寧、幸福を身につけるために、最も重要な教育的・治療的要因であること」、ソローキンはそのことを利他主義研究によって明らかにしようとしたのである（Sorokin, 1950：邦訳262）。

そしてこの利他的行為こそは、制度化された福祉支援活動の欠点を補う働きを持っている。福祉活動は、制度化されたとたんに、形式的、官僚主義的な冷厳さをともなうことが多い。善き隣人は、そうした福祉制度の欠点を補う働きを持っている、とソローキンはいうのである。整った施設や制度ではなく、温かい心、同情心、友情や愛情などの贈り物を届けるからである（Sorokin, 1950：邦訳257）。

結論

「善き隣人」や妙好人の利他的行為は、死ぬまで永続するものであろう。なぜ、そのように長期的な支援活動が可能となったのか。彼らの行為から、ただちにその答えを引き出すことは難しい。しかし彼らの意識構造と実践例を明らかにすることによって、そうした支援活動を継続的に行うためのヒントをかいまみることができたのではないだろうか。超意識は、ただ生きることではなく、善く生きることを、教えてくれるものである。それは知識としてではなく、実践的に理解されなければならない。あるいはそれは、この世界において、真・善・美の実現を目指す力となるものである。支援活動が、そのような意味においてなされるとしたら、その活動は、時と処を選ばない、より力強いものとなるであろう。もちろん、そうした理想の実現への道筋を示すところまでには、いまだいたってはいない。しかし「善き隣人」や妙好人、その他の人々によってなされた、超意識からくる利他的行為の実践例は、すでにソローキンや柳によって数多く集められている。一方では、すでに集められているこれらの資料を精査すること、他方では新たな利他主義的行為の実例を収集・分析すること、それからは、きたるべき利他主義社会学の完成にとって、不可欠の課題であるといえるだろう。

［付記２］本研究は平成28年度～平成30年度科学研究費補助金基盤Ｃ「初期ソローキン社会学にみる利他主義研究の萌芽―ロシア時代の未公刊・新資料の分析」（課題番号16K04043　研究代表吉野浩司）の支援を受けている。

文献

カズンズ、ノーマン、2001、『笑いと治癒力』岩波書店.

菊藤明道、2017、『鈴木大拙の妙好人研究』法藏館.

鈴木大拙、1972、『日本的霊性』岩波書店.

Sorokin, P.A., 1947, *Society, Culture, and Personality: Their Structure and Dynamics,* Harper and Brothers, 1961、『社会学の基礎理論―社会・文化・パーソナリティ』（内田老鶴圃）.

――――, 1950 [2010], *Altruistic Love: A Study of American Good Neighbors and Christian Saints,* Kessinger Publishing. 1985、『利他愛―善き隣人と聖者の研究』（広池学園出版部）.

――――, 1954 [2002], *The Ways and Power of Love: Types, Factors, and Techniques of Moral Transformation,* Templeton Foundation Pr., 1977、『若い愛・成熟した愛―比較文化的研究』（広池学園出版部）.

ハン、ティク・ナット、2017、『愛する―ティク・ナット・ハンの本物の愛を育むレッスン』河出書房新社.

ペック、M・スコット、2010、『愛すること、生きること―全訳『愛と心理療法』』創元社.

三原武司、2010、「再帰性の起源としてのミラーニューロン―ギデンズ社会理論の生物学的根拠」『年報社会学論集』第23号、165-175ページ.

柳宗悦、1991、『妙好人論集』岩波書店.

柳宗悦・衣笠一省編1960[1989]、「妙好人―因幡の源左」百華苑.

吉野浩司、2006、「P. A. ソローキンの戦争社会学

―利他主義による対立物の一致」、新原道信他編『地球情報社会と社会運動―同時代のリフレクシブ・ソシオロジー』ハーベスト社、pp.81-99.
――――、2009、『意識と存在の社会学―P. A. ソローキンの統合主義の思想』昭和堂.
――――、2013a、「文化社会学による日本仏教史の解釈の試み―浄土思想の形成と変容を中心に」『韓日語文論集』(韓国日語日文学会)第17輯、193-210ページ.
――――、2013b、「日本浄土教の統合的理解のために―柳宗悦『南無阿弥陀仏』の知識社会学」『韓国日本近代学研究』(韓国日本近代学会)第38号 193-220ページ.
――――、2014、「妙好人は体制に順応するだけの存在か―機能主義社会学による第十八願の分析を通じて」『韓国日本近代学研究』(韓国日本近代学会)第43号、255-276ページ.
渡辺照宏、1958、『日本の仏教』岩波書店.